

（論文）

社会科指導法における授業力向上に関する研究

— 対話型授業構想を取り入れて —

杉浦 勉（北翔大学）

要 旨

本研究は、教員養成段階における社会科授業力の向上を目指し、ICT活用指導力と授業構想力の2つの視点を重点とした社会科指導法に関する学生の学びの一端を明らかにすることが目的である。具体的には、模擬授業担当学生と科目担当教員が共に授業づくりを行う対話型授業構想を取り入れることで、ICT活用指導力と授業構想力の重点的な育成を図り、社会科指導法における授業力向上を目指した。対話型授業構想により、学習者の学びのイメージを育成することができ、模擬授業の精度を高めるといった効果があった。一方で、科目担当者が対話型授業構想を行うための時間確保や学生主体の授業構想とする留意点が求められるといった課題が残った。

キーワード：授業構想力・ICT活用指導力・対話型授業構想・コーチング

I. 研究の目的

中央教育審議会（2021）は、令和の日本型学校教育の実現を目指し、その姿として全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を示唆した¹⁾。具体的には、子供の学びや教職員の姿等を示し、今後の教師に必要な資質能力をICT活用指導力やファシリテーション能力等と指摘している。同様に、中央教育審議会教員養成部会（2020）は、Society5.0時代における教師及び教員組織の在り方の中で、主に「教師のICT活用指導力の向上方策」について取り上げている²⁾。注目すべきは、教員養成段階における教職課程の各教科指導法などの授業について、以下のように言及している点である³⁾。「こうした教職課程の各教科の指導法などの授業において、学生がICT活用指導力を確実に身に付けることができるように、例えば、国において、学校におけるICTを活用した学習場面や各教科等の指導におけるICT活用に係る動画コンテンツを作成し提供することで、大学の授業等において活用するよう促すとともに、大学の授業の取組状況のフォローアップ等を通じて、大学が実践的な内容の授業を確実に実施できる仕組みを構築していくことが求められる。」

平成29年11月には、教育職員免許法施行規則の改

正とともに教職課程コアカリキュラムの制定、また「教育の情報化に関する手引 令和元年12月」においても、教員養成段階におけるICT活用指導力について、各教科指導法等の講義で育成することの重要性が求められている⁴⁾ことが明らかである。教員養成段階においてもICTに関する指導力が求められていることから、「個別最適な学び」の実現に向けたツールとしてICTが必須になっているといえよう。

一方で、従来の日本型学校教育の成果ともいえる「協働的な学び」に関する指導力に関して、従来通り教員養成段階における各教科の指導法等の講義で育成することが求められているだろう。多様な他者とともに問題を発見し、解決する資質・能力を育成する授業力を教師志望学生に身に付けさせていく必要がある。二宮ら（2019）は、本学における教職を目指す学部生を対象とした研究結果から、教員に必要な資質・能力の1つとして、「学習指導力」を挙げ、授業構想力や模擬授業などの講義内容における工夫・改善の必要性を指摘している⁵⁾。

そこで、本稿では、教員養成段階における社会科授業力の向上を目指し、ICT活用指導力と授業構想力の2つの視点を重点とした社会科指導法に関する学生の学びの一端を明らかにすることを目的とする。具体的に

は、学校現場で実施される校内研修における事前研究協議を参考に、教材研究や授業構想、指導案作成等の模擬授業前段階における授業検討時間を設定し、模擬授業担当学生と科目担当教員が共に授業づくりを行う対話型授業構想を取り入れることで、ICT活用指導力と授業構想力の重点的な育成を図り、社会科指導法における授業力向上を目指した。

II. 対話型授業構想

1. 講義における授業構想に関して

学校現場で実施される校内研修において、教員の資質・能力の向上を図ることがその目的であることは周知のとおりである。一般的な校内研修は、公開授業を基本としているだろう。公開授業前に授業構想を行う「事前研究協議」や「公開授業」、公開授業後に授業者と授業参観者が協議を行う「事後研究協議」を通して、教員の資質・能力の向上を図っていく研修である。

「事前研究協議」に関しては、複数の教員と協議を重ね、授業観や指導方法等を交流し合うことで、授業構想の幅が広がることが期待される。

「事後研究協議」に関しては、子供の学びの姿を通して、様々な教員の意見から授業改善の視点が明らかとなり、授業力向上に繋がっていくだろう。

一方、教員養成段階における各教科の指導法は指導方法や指導技術をどのように身に付けさせているのだろうか。三浦（2020）は、模擬授業と模擬授業における観察、学生評価、模擬授業の継続という視点から学生の授業イメージを高めることが授業力向上に繋がることを述べている⁶⁾。ここで、学校現場で実施されている「校内研修」と教員養成段階における各教科の指導法等の「講義」を比較した際に、大きな違いとして挙げられることは「事前研究協議」ではないだろうか。模擬授業実施前に行っている取組に関して、三浦（2020）は、学生が学習指導案作成後に授業の進め方等について科目担当者へ行う「説明」⁷⁾を取り入れている。つまり、模擬授業実施前の授業構想に関して、学生自身の取組となっていることが分かる。模擬授業の継続により、授業イメージを高めさせることに効果があることに関して先述したが、授業イメージをいかに育成するべきか。本研究では、この課題解決を目指し、対話型授業構想を取り入れた講義を実践した。

小学校教諭の経験がある科目担当者が模擬授業者で

ある学生と授業検討を行い、授業を構想した。その上で、従来の模擬授業や質疑応答、授業評価等を実施した。従来の講義内容と本研究の講義内容に関して表1に示す。

表1 従来の講義内容と本研究の講義内容の比較

【従来の講義内容】	【本研究の講義内容】
①学習指導案作成	①対話型授業構想・ 学習指導案作成
②説明（科目担当者へ）	
③模擬授業	②模擬授業
④評価・記述	③評価・記述
⑤討議	④討議
⑥質疑・応答	⑤質疑・応答
⑦総括	⑥総括

対話型授業構想を行うにあたり、留意すべき点は教員主導ではなく、模擬授業者である学生自身が主体となって授業を構想することだと考える。

2. コーチングの活用

学生と科目担当者が共に授業を構想するにあたり、教員主導ではなく、あくまでも学生主体となるような対話型授業構想を取り入れた。その意図として、教員主導における授業構想の場合、学生自身が授業イメージを高めることができず、模擬授業を実施した際もスムーズな授業展開が難しいことが予想されたためである。あくまでも模擬授業者である学生の考えや思いを引き出す対話型授業構想を目指し、コーチングの考え方を活用した。教師と子供の関係性について、コーチングと従来の「教える（ティーチング）」を基に図1に示す。

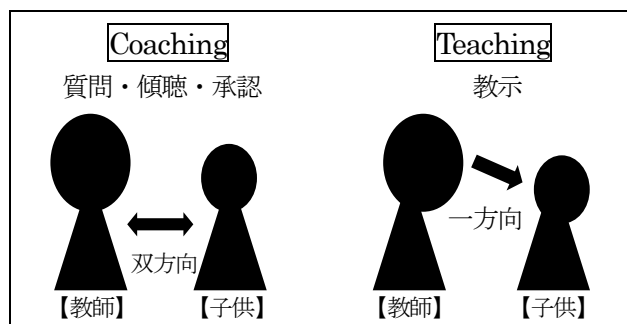


図1 コーチングとティーチングのイメージ（筆者作）

コーチングは、子供の主体性を引き出す教育的手法であり、問答型コミュニケーションが大きな特徴⁸⁾と

いえる。コーチングのメリットは、教師と子供が同じ目線に立ち、教師が子供の能力を引き出すことである。対話型授業構想で最も留意すべき点として、あくまでも学生主体であることを目指し、科目担当者がコーチングを活用し、主に「問い」による聞き役に徹することが求められる。コーチングの活用により、学生自身が授業イメージを高め、主体的に模擬授業に取り組むことができると考えた。

コーチングを活用した対話型授業構想の実施方法について述べる。科目担当者は、小学校教諭の経験を基に、科目担当者自身の目指す授業像や子供の学びの姿を学生に一方向的に説明したり、教えたりする教え込みではなく、模擬授業者がどんな授業を行いたいのか、またその授業を実現するために必要な手立てや行ってみたい学習活動などについて、「問い」によって模擬授業者に考えさせ、その考えを引き出す手法を行った。対話型授業構想で行った主な「問い」を表2に示す。

表2 対話型授業構想における「問い」

<p>①模擬授業者が目指す授業像を明らかにする。</p> <p>問)「どんな授業を行いたいですか？」</p> <p>「授業の終わりに子供はどんな姿になっていることを目指しますか？」</p> <p>②明らかになった授業像のために必要な手立てを考える。</p> <p>問)「①の授業になるために、どんな学習活動を設定してみたいと思いますか？」</p> <p>③授業イメージで不足していることを確認する。</p> <p>問)「聞きたいことやわからないところはありますか？」</p>
--

表2に示した授業構想に関しては、「逆向き設計論」を活用し、授業の終わりいわゆる「出口」をイメージする授業づくり⁹⁾を行うことで、授業イメージを高め授業構想力の育成に繋げていきたいと考えた。

3. ICT 活用指導力

ICT活用指導力に関して、「授業にICTを活用して指導する能力」に着目し、教員のICT活用指導力調査の結果¹⁰⁾を参考とした。81.6%と活用可能が最も高い結果を示した項目「B-1 児童生徒の興味・関心を高めたり、課題を明確につかませたり、学習内容を的確にまとめさせたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。」を取り上げ、「教育の情報化に関する手引(追補版)」に示されてい

る「学校におけるICTを活用した学習場面」の中で、「A1 教師による教材の提示」に関する指導力育成を目指した。その意図は、2点である。1点目に、社会科という教科特性を活用した模擬授業を実施することができる考えたためである。社会科学習は、どの単元の学習内容においても、また1時間の授業のどの場面においても、動画や画像、グラフなどの教材資料を活用しやすい教科であるといえる。2点目に、学生がICT活用の有用性を体験することができる考えたためである。模擬授業の経験が少ない学生にとって、授業構想だけでなく、教材準備にも時間を要することは予想される。教材準備を短時間で済ませることで、授業の流れを確認するなど模擬授業の練習に時間を掛けることができるなどのメリットがある。教材準備に時間を要せず、かつ資料提示も容易に行うことができ、画像に直接文字を書き込んだり消したりすることができるなど、ICT活用の有用性について模擬授業を通して経験することで、さらなるICT活用方法への興味関心を高め、ICT活用指導力の向上に繋がると考えた。

模擬授業においては、写真1のように、大型テレビを活用し、主に授業の導入時にグラフや写真などの教材を提示する実践を行った。大型テレビとの接続に関しては、「Set Top Box」を活用し、学生が所有する端末と無線接続により資料等を表示できるようにした。



写真1 大型テレビを活用した教材提示の様子

模擬授業者が大型テレビを活用した資料提示を行う際も、模擬授業実施前に接続方法の確認作業のみで容易に使用することができるため、抵抗感や苦手意識等があった場合もICT活用への負担感なく、授業を展開することに集中できると考える。

本研究では、「教育の情報化に関する手引(追補版)」

に示されている「学校における ICT を活用した学習場面」の中で、主に「A1 教師による教材の提示」を模擬授業で実践することで ICT 活用指導力の育成を目指したが、「B 個別学習」や「C 協働学習」における ICT 活用方法についても取り上げ、子供の思考の可視化・共有化による高い学習効果が期待される模擬授業等を講義の中で行っていくことが求められるだろう。また、科目担当者自身が実践の場である各学校現場における ICT 活用に関する授業実践を継続的に参観していくなど、ICT 活用指導力に関する研究を今後も深めていく必要があるだろう。

Ⅲ. 研究の方法

1. 研究対象

研究対象者は私立大学教育学部専攻の3年次対象科目「社会科指導法Ⅱ」履修学生26名である。講義科目「社会科指導法Ⅱ」はコース選択必修科目であり、対象年次の約半数以上が選択し履修した。履修者は8月中旬から実施する4週間の教育実習を控え、教育実習前に模擬授業等の実践的な学びを目的として受講した、意識の高い学生といえる。令和5年4月14日から8月4日までの全15回実施した。

2. 授業のねらい

授業のねらいを表3に示す。

表3 授業のねらい

「社会科指導法Ⅰ」で身に付けた社会科に関する基礎的な指導技術を踏まえ、教材研究の基で学習指導案を作成し、模擬授業を行います。教材研究では、社会的事象の教材化の視点について考察します。学習指導案の作成では、児童の発達に沿った学習活動を考え、問題解決的な学習を構想しますが、単元レベルと本時の授業レベルについて重点的に考察します。模擬授業では、社会科学習に必要な指導技術を身に付けていきます。また、アクティブラーニングを積極的に取り入れ、授業づくりの課題解決を図ります。

3. 授業の到達目標

授業の到達目標は、以下の3点である。

- 1) 児童の発達を踏まえた学習活動を考え、学習指導案をつくることができる。
- 2) 児童の興味関心を高める学習問題をつくり、多様な

方法で追究する社会科授業を考える。

- 3) 小学校の社会科授業に必要な指導技術を身に付けることができる。

4. 講義計画

講義計画を表4に示す。なお、模擬授業実施前の授業検討時間に関しては、講義時間外に実施した。

表4 講義計画

回	日付	講義内容
1	4/14	講義ガイダンス
2	4/28	模擬授業① (3名)
3	5/12	模擬授業② (3名)
4	5/19	模擬授業③ (3名)
5	5/26	模擬授業④ (3名)
6	6/2	模擬授業⑤ (3名)
7	6/9	模擬授業⑥ (2名)
8	6/16	公開授業参観 (オンライン公開授業)
9	6/23	模擬授業⑦ (2名)
10	6/30	模擬授業⑧ (3名)
11	7/7	公開授業参観 (オンライン公開授業)
12	7/14	模擬授業⑨ (2名)
13	7/21	模擬授業⑩ (2名)
14	7/28	社会科指導技術
15	8/4	講義まとめ

5. 模擬授業

模擬授業は、履修学生の人数と講義時間(90分)を考慮し、一人15分以内で実施した。模擬授業者以外の履修者は、児童役として模擬授業に参加した。模擬授業終了後に、質疑応答と総括を行い、Microsoft formsを用い、学生による授業評価を実施した。

6. 分析方法

分析資料は授業評価である。履修者全員が行った模擬授業の中から3名を抽出し、授業評価の記述内容を分析、考察し、対話型授業構想における効果を検討した。分析対象とした3名の抽出に関しては、学習状況を考慮し、高位、平均的、低位それぞれ抽出し、さらに模擬授業実施時期を序盤、中盤、終盤の3つに分け、それぞれの時期から1名ずつ選択した。授業評価に関しては、全ての学生のものではなく、提出された順番にまとめた記述を表5~7にまとめた。

IV. 結果と考察

1. 模擬授業 A

(1) 授業評価

学習状況が低位である模擬授業者 A は、序盤の第 2 回 (4/28) に、第 3 学年の単元「店ではたらく人と仕事」(11 時間抜きの 8 時間目) の学習内容「商品はどこから」にて模擬授業を行った。

表 5 模擬授業者 A の授業評価 (下線は筆者)

S1 : <u>活動の内容がとても楽しくていい</u> と思いました。全部の産地を集めるために集中して作業することができる点や、達成感が味わえる点が児童の意欲を掻き立てることができるのではないかと思います。
S2 : <u>スーパーの単元で地図を使うのは</u> 、都道府県の場所を探したり、地理的思考力をのばすことに効果的になるのではないかと感じ、とても印象に残った。
S3 : <u>チラシをもとに授業をすることで</u> 家族が見ているものを児童自身も見ることができて、楽しいのかなと思います。例えば、もも肉でも国産とブラジル産といった違いもあるので、その商品の実際のラベルをもとに産地の違いを世界地図などを用いて、遠いところからきてるんだなと言った発言を引き出すのもいいなと思います。
S4 : <u>チラシと地図を用いた活動は斬新で、新しい発想</u> だったので凄く面白かった。子どもたちの主体的な学びを実現するには効果的な指導だと感じた。教材の提示をするにあたって、先生がどの商品がどの産地に当たるのかを全てチェックする必要はないかもしれないが、正解を持っている方が「全部で〇個あるので見つけてみてください」など、ゴールを見据える方が子どもたちの競走心をくすぐりながら授業が出来ると思った。
S5 : <u>スーパーに行くという活動を活かしてスーパーのちらしに載っている食品の産地を覚えることができるようになって</u> いたし、北海道産はこんなにもあるんだ！という風に気づきもあったし、どんどん探したくなって、すごく楽しい活動だった。 <u>児童がどんどん取り組みたくなる活動だ</u> なと思った。
S6 : <u>チラシを切り抜いて日本地図に貼っていく活動は</u> 楽しいものであると感じた。自分が質問した読めない漢字についてはパソコンを使って、その漢字を書いて調べさせる電子辞書みたいな形でやるのも良いと思った。
S7 : <u>地図とチラシで色々な見方で資料を見る活動</u> だったためテストなどに生かすこともできる活動で良かった。 <u>日本だけでなく世界の地図もあるため</u> お店で売られている商品が日本だけでないことも <u>学べて楽しい授業</u> になると感じた。

(2) 考察

本時の目標は「商品の仕入れ先に着目し、それらが国内や外国にわたることを白地図にまとめて、他地域と広く関わっていることを捉える」である。また、本時のまとめは「日本各地や世界各地からいろいろな品物が運ばれてきて、お店に並んでいるんだ」である。

授業構想時において、本時のゴールといえる「出口」に向けて、模擬授業者 A は「チラシ」を教材として活用することを構想した。模擬授業者は、「チラシにある商品の産地を白地図に書き込む活動案」を構想したが、科目担当者が「チラシを切って白地図に貼る活動案」を助言し、後者を選択し模擬授業を実践した。

表 5 に示した授業評価の記述からは、チラシと白地図を用いた学習活動に関して、「楽しい」「斬新で新しい発想」という評価が多くあるため、有効であったと分析する。また、S6 の授業評価からは、チラシを切り抜いて白地図に貼る活動における有効性も記述されている。

S2 の授業評価では、スーパーマーケットを社会的事象とする単元における地図の活用効果の高さを感じていると考察できる。同様に、S3, S5, S7 が、地名や国名、その位置に関しての知識としての定着効果を期待できると考えていると分析する。

また、模擬授業 A における改善案を構想した授業評価も見られる。S3 や S4, S6 は、それぞれ自分が実践する時にやりたい手立てや学習活動を構想していると分析する。

以上から、模擬授業者 A における対話型授業構想の効果について考察する。

授業評価の多くが、「楽しい」という感想を挙げた理由について、模擬授業者 A がスムーズに授業展開できたことがその主な要因だと考察する。それは、模擬授業者 A と小学校教諭経験のある科目担当者が共に授業構想し、授業の流れを確認し、不安なところを解決し、未知といえる「学習者の学びのイメージ」を高めることができたことで、自信をもって模擬授業を実践することができたと考える。

また、チラシを切って白地図に貼る学習活動に関する具体的なイメージをもつことができ、必要な説明や指示を授業構想時に明らかになったことが、模擬授業場面でも効果を発揮したと考察する。

模擬授業の精度の高さが対話型授業構想により生まれたと分析する。

2. 模擬授業 B

(1) 授業評価

学習状況が高位である模擬授業者 B は、中盤の第 7 回 (6/9) に、第 3 学年の単元「事故や事件からまちを守る」(7 時間扱いの 1 時間目) の学習内容「事故が起きたら」にて模擬授業を行った。

表 6 模擬授業者 B の授業評価 (下線は筆者)

S8 : スムーズに本時の課題までいけていたり、その前の話が面白くもあり、児童も楽しく授業を受けれると思うくらい話上手だと感じました。また、説明も端的で分かりやすく、写真のどこに注目すればいいかなどの確で、ちょっとした工夫もいいと思いた。

S9 : 死傷者数や事故件数を予想する時に、札幌市のヒントを出したり、数字を 1 桁目から書くという小さな工夫が、児童の興味を惹きつけるものでした。小さな工夫が詰まった授業にすることが大事だとわかりました。

S10 : 本時で何をすることが分かりやすい説明や板書であり、活用していた資料も適切な場面で活用していた。予想から答えというように児童の思考の流れを促す授業でとても良かった。この流れがあることで児童は本時の学びを深められるのではないかと感じた。

S11 : 件数を表示する時に一桁から発表していく、「ここ見てね」といった指示が子どもたちにとって楽しくできそうだと思います。指示をした時に「質問ありますか。」といった発言をすると児童の理解や教師の意思が伝わるかといった確かめにもなると学びました。

S12 : 交通事故件数を予想する時、どのくらいか想像することが出来なくて困ったけどヒントとして札幌市のデータを用意していたのがとても良かった。先生も言っていたように予想させたことに対しての正解を発表する時の工夫は、子どもたちもより注目して楽しんで学べると思った。

S13 : 言葉をわかりやすく伝える技術があり、授業の流れも自然でとてもわかりやすかったです。また、D 市の交通事故の件数や死傷者数を考える活動の時に、適切なヒントを提示するという工夫していたことで、児童の意欲を引き出して児童の記憶にも定着しやすそうな授業になっていると思いました。

S14 : スムーズな導入だったし、子どもの発言に対して「どこからわかった?」ときいたり、難しい言葉が出てきた時も「わかりますか?」と発問で返していた所が、凄いいいなと思っただ。早く知りたい!と思わせるような授業で、中でも発生件数を 1 桁から出したことで盛り上がっていて、子どもたちが楽しめる工夫が施されている授業だなと思いました。

(2) 考察

本時の目標は「市内の交通事故発生件数の変化、事故発生時間別の死者数に関心をもち、棒グラフの意味を読み取ることができるようにする」である。また、本時のまとめは「D 市では交通事故が年間 200 件起きていて、年々発生件数が減っている」である。

授業構想時において、本時のゴールといえる「出口」に向けて、模擬授業者 B は「交通事故発生件数と死傷者数」を教材として活用することを構想した。科目担当者は、その表やグラフ資料を提示する前に、D 市の「交通事故発生件数や死傷者数」を予想する学習活動を提案し、模擬授業者 B も賛同し授業を構想した。その後、模擬授業者 B は実際に模擬授業の練習を行ったところ、D 市の「交通事故発生件数や死傷者数」を予想しやすくさせる手立ての必要性を感じ、授業改善を図った。模擬授業者 B は、他の地域の「交通事故発生件数や死傷者数」を先に提示する案を科目担当者に提案し、「札幌市における交通事故発生件数」に関する表の活用も追加した授業を構想し、模擬授業を実践した。

表 6 に示した授業評価の記述からは、「交通事故発生件数や死傷者数」を単に提示する学習活動よりも、それを予想する学習活動を取り入れた授業展開に効果があったことが明らかである。さらに、S9 や S12、S13 の授業評価からは、「札幌市における交通事故発生件数」に関する資料も有効的であったと分析する。それに加え、S9、S11、S14 の授業評価からは、D 市の「交通事故発生件数や死傷者数」を提示する際に、学習者の興味を惹く提示の工夫があったことで、学習効果をさらに高めていたと分析する。

以上から、模擬授業者 B における対話型授業構想の効果について考察する。

多くの授業評価からは、授業構想した手立てや学習活動が概ね効果があったと分析する。特に、S13 の授業評価の記述にあるように「D 市の交通事故の件数や死傷者数を考える活動の時に、適切なヒントを提示するという工夫していたことで、児童の意欲を引き出して児童の記憶にも定着しやすそうな授業」であったことから、模擬授業者 B における対話型授業構想の効果があったと分析する。また、科目担当者の小学校教諭の経験に加え、模擬授業者 B の他の地域の資料提示に関する提案といった対話型授業構想を行うことができたことで、模擬授業の精度を高めたと分析する。

3. 模擬授業 C

(1) 授業評価

学習状況が平均的にある模擬授業者 C は、終盤の第 12 回 (7/14) に、第 3 学年の単元「かわる道具とくらし」(6 時間扱いの 6 時間目) の学習内容「道具とくらしのうつりかわり」にて模擬授業を行った。

表 7 模擬授業者 C の授業評価 (下線は筆者)

S15: ワークシートを黒板に貼ってみんなで年表を完成させるという動きのある活動がとても良かった。社会科は座学になりがちな印象であるが、今回の授業は楽しく学べる授業で参考にしていきたいと思った。

S16: 活動がメインの授業で子どもたちは飽きずに取り組みると感じた。子どもたちへの指示も明瞭でわかりやすく良かった。プリント二枚の記入はゆとりを持って時間設定をしてあげると苦手の児童に対しても配慮出来てよくなると思う。さらに、設定時間を児童に伝えてあげると見通しを立てて活動に取り組みると思う。

S17: みんなに前に出てきて黒板に紙を貼ってもらうことでみんなの意見を見れるしみんなの絵をみるのは楽しかったので興味関心がひかれてよかったです。

S18: 児童に対する発問の仕方がとてもわかりやすくてよかったです。また、ワークシートを黒板に貼り、児童たちのワークシートを全員が交流できて良いと思いました。

S19: 終始楽しい雰囲気だった。イメージできていない子に向けて、先生が実際に書いたものを貼ると言うのが親切だと思った。昭和に集中していたことから、昭和がより暮らしが発展したということがわかりやすくなっていた。

S20: 児童に絵を描かせて、黒板を年表に見立てたときにどの位置関係になるのかというのが一目にわかって良かった。ICT環境が整っている場合にはロイロノートの使用などでもできると思った。

S21: 導入の入り方がとてもスムーズで単元のまとめの仕方がとても面白かったです。年表にしてみると、時代の移り変わりが目に見えてわかるので、児童にとっても楽しみながら出来る活動だったと思います。

S22: 絵を描く活動は児童も楽しく昔の暮らしをイメージできるのでいい活動だと感じました。また、黒板全体を使ってワークシートを貼っていく活動では、年表みたいになっていて、何がいつどのような時に使うのか分かりやすく見れるため、全体で共有し理解できるいい板書になるのではないかと感じました。

(2) 考察

本時の目標は「年表づくりを通して、道具と人々の暮らしが移り変わってきたことを表現できる」である。また、本時のまとめは「道具とともに人々の暮らしもどんどん便利になっていった」である。

授業構想時において、本時のゴールといえる「出口」に向けて、模擬授業者 C は「道具調べカード」と「くらしの様子カード」の 2 つのワークシートを教材として活用することを構想した。模擬授業者 C が模擬授業で行いたい学習活動を基に、科目担当者は学習者に作成させたワークシートを黒板に貼らせ、年表づくりを行う学習活動 (写真 2) を助言し、模擬授業者 C が賛同し授業を構想した。



写真 2 ワークシートを黒板に貼り年表を作る様子

表 7 に示した授業評価の記述からは、学習者が作成したワークシートを黒板に貼り年表を作る学習活動が有効であったということが明らかである。ワークシートを黒板に貼るという学習活動の効果は 2 点あると分析する。1 点目に、S15, S16 の授業評価から、動きのある活動のよさが挙げられていることである。2 点目に、S17, S18, S20, S21, S22 の授業評価から、意見交流や時代の移り変わりの視点で視覚的な理解を図ることができることが挙げられていることである。

以上から、模擬授業者 C における対話型授業構想の効果について考察する。

模擬授業者 C は、対話型授業構想により、授業イメージを高めることができ、自信をもって模擬授業を実践することができたと分析する。その理由として、S19 の授業評価にあるように、模擬授業者 C 自身もワークシートに記述し、学習者の視点に立った教材準備を行い、主体的に授業構想していたことを挙げる。

V. 総合考察

3つの模擬授業に関して、結果と考察を論じたが、その他の授業に関しても、楽しいなどの肯定的な評価が多く見られた。対話型授業構想を取り入れた効果に関して、授業構想力とICT活用指導力の2点から、本研究の総合考察を論じる。

1. 授業構想力向上に関して

対話型授業構想により、履修者の授業構想力向上を目指した。どの授業評価にも楽しいなどの肯定的な評価が多く見られたことから、全ての模擬授業が、学校現場で実践することができる高い精度の授業であったと分析する。その根拠として以下に3点述べる。まず、1点目に、模擬授業者Aの授業評価の中で、「児童がどんどん取り組みたくなる活動だなと思った。」(S5)という記述から、学習者の学びのイメージをもち、学習者の興味、関心を高める工夫が行われた授業であったためである。2点目に、模擬授業者Bの授業評価の中で、「予想から答えというように児童の思考の流れを促す授業でとても良かった。」(S10)という記述から、学習者の学びに対する思考の流れを大切にしたい授業展開であったためである。3点目に、模擬授業者Cの授業評価の中で、「イメージできていない子に向けて、先生が実際に書いたものを貼る…」(S19)という記述から、学習者一人一人の学習状況を予想し、つまづきが見られる学習者への手立てを講じた授業を行っていたためである。

教員養成段階の学生にとって、「学習者の学びのイメージ」をもつことは容易ではない。それは、実際に子供たちを相手に授業実践した経験がないことが主な要因であることは明らかであるが、教育実習等で授業を経験した場合でも同様なことがいえるだろう。

授業を構想する上で、「学習者の学びのイメージ」をもっていることが重要であるが、それをどのようにもたせて授業を構想させていくのかということが、筆者自身がこれまでの講義実践を省察した際の大きな課題であった。これまでの講義実践では、筆者自身が履修学生を児童役に示範授業を行う等により、「学習者の学びのイメージ」をもたせることをねらった実践を実施してきた。しかし、模擬授業者の授業における精度が高いとはいえない実態があり、十分な授業力育成にまで至っていなかったといえる。

本研究では、模擬授業前に、対話型授業構想を取り

入れたことで、模擬授業者が授業を構想する話合いの中で、「学習者の学びのイメージ」を高め、模擬授業者が高い精度の模擬授業を実践することができたと考察する。

また、模擬授業者Aの授業構想力に関しては、授業構想した学習活動における「学習者の学びのイメージ」をもつことができ、必要な説明や指示を授業構想段階で明らかにすることができ、模擬授業場面でも効果を発揮したと考察する。

模擬授業者Bの授業構想力に関しては、科目担当者の小学校教諭の経験に加え、模擬授業者Bの他の地域の資料提示という提案もある対話型授業構想を行うことができたことで、模擬授業の精度を高めたと考察する。

模擬授業者Cの授業構想力に関しては、対話型授業構想により、模擬授業者Aと同様に、具体的な授業イメージを高めることができ、自信をもって模擬授業を実践することができたとともに、模擬授業者C自身が記述したワークシートを準備するなど、学習者の視点に立って、主体的に授業構想していたことを挙げる。

模擬授業者Eの授業後の振り返り記述を表8に示す。

表8 模擬授業者Eの振り返り記述

模擬授業を初めてやってみて、板書が難しいなと感じ、字のバランスやまっすぐ書くことをもっと慣れないとできないので教育実習の時は字が下がらないように気をつけながら書こうと思った。ワークシートを見せながら、記入する場所を確認したり、少し時間が経ってからヒントや注目してほしいところを教えてあげたのが良かった点だと思った。

表8の模擬授業者Eの振り返り記述から、模擬授業者Eが初めての模擬授業を実践したこと、板書の課題と改善を省察していることが分かる。さらに、ワークシートを効果的に活用することができたことを成果として挙げている。

模擬授業者Eは、対話型授業構想時において、D市の交通事故発生件数や傷者数が減少していることが分かる表を教材として活用することを構想し、D市警察署に交通事故発生件数や傷者数の減少原因について問い合わせるなど、主体的に教材研究に取り組むことができた。模擬授業者E自身が取り上げる社会的事象について追究し続け、模擬授業に取り組む様子からは、よりよい授業を志向していると考察することができる。

また、対話型授業構想に関しても当初は疑問を抱き、「授業構想は授業者が行うもの」という考え方を示していたが、模擬授業実践後には対話型授業構想による効果を感じ、さらに意欲的に受講していたことで、模擬授業者 E の授業構想力の向上を図ることができたと分析する。

一方で、課題としては、対話型授業構想を行う時間である。模擬授業者自身は、講義全 15 回に加え、さらに 1 回分多く受講することになる。教材研究や授業構想、指導案づくりなど、他の科目の指導法においても、時間を要するが、履修者の負担感は少なからずあると考察する。

さらに、科目担当者も同様に、模擬授業者の人数分の対話型授業構想における時間を要するため、時間確保として講義時間外の業務遂行を円滑に行うなどの必要性があったことが課題として残る。

ただ、模擬授業者は、科目担当者との対話型授業構想により、授業構想や教材研究、指導案づくりを短時間で効果的に取り組むことができたという効果もあったため、科目担当者として学生のよりより学びや成長に繋がる教育活動として大きな成果を感じている。

また、科目担当者が対話型授業構想を行うにあたり、学生主体となる話し合いとなるよう留意する必要性もあるだろう。これについては、本研究ではコーチングの活用が効果的であったといえる。

2. ICT 活用指導力向上に関して

ICT 活用指導力に関しては、「教育の情報化に関する手引（追補版）」に示されている「学校における ICT を活用した学習場面」の中で、主に「A1 教師による教材の提示」を模擬授業で実践させた。

模擬授業において ICT 活用を義務付けしたわけではないため、模擬授業者によっては、ICT を活用しない模擬授業を実践したということになる。ICT を活用していない模擬授業という状況では、すべての履修者が授業における ICT 活用指導力を高められたとは言えないだろう。

模擬授業において ICT 活用を義務付けることで、その問題解決を図ることは容易であるが、ICT 活用は授業の目的ではなく、あくまで本時 1 時間の目標を達成するために必要なツールの一つであると考え。そこで、本研究では、ICT 活用を義務づけではなく、模擬授業者の考えに沿って、ICT を活用しない模擬授業も対話型授業構想時に科目担当者は承認した。

模擬授業者 F を取り上げ、模擬授業者の ICT 活用指導力の向上に関して考察する。模擬授業者 F は、PowerPoint を活用した模擬授業を実践した。説明や発問、指示を大型テレビに映し、文字だけでなく、ワークシートで注目させる点なども視覚的に捉えさせる工夫を行った。模擬授業者 F の授業後の振り返り記述を表 9 に示す。

表 9 模擬授業者 F の振り返り記述

今回模擬授業をしてみて、スムーズに授業が進められてよかった反面、実際に児童の前ではどこまで脱線してしまうのか、どんな発言が出るのか、考える機会になった。スライドを使わない、板書での授業も考えてみようかなと思った。

表 9 の模擬授業者 F の振り返り記述では、ICT 活用指導力に関して、スムーズな授業展開ができた成果や課題となる部分について、自分なり省察することができていることから、ICT 活用指導力を高めることができたといえるだろう。

ICT を活用しなかった模擬授業者も他の履修者の模擬授業において児童役として ICT を活用した授業を体験することができたことは、授業イメージの育成という面で、ICT 活用指導力を高める効果があったといえる。

その他に、ICT 活用指導力の向上に関する成果を履修者の授業評価を基に表 10 にまとめた。

表 10 本研究における ICT 活用指導力向上の成果

- ・大型テレビに無線接続で資料や画像を容易に提示することができた。
- ・資料を拡大したり、書き込んだりすることができるため、注目させたい部分を強調できる。
- ・動画の活用により学習効果が高まることを実感できた。

また、本研究は模擬授業の授業評価に関して、Microsoft forms の活用を図った。このことから、授業における ICT 活用指導力の向上だけではなく、学習評価に関する ICT 活用指導力の向上も図ることができたと考察する。

一方で、課題としては、「教育の情報化に関する手引（追補版）」に示されている「学校における ICT を活用した学習場面」の中で、「B 個別学習」や「C 協働学習」における ICT 活用方法に関して、子供の思考の可視化・共有化による高い学習効果が期待される模擬授業

等を講義の中で取り上げていくことが求められるだろう。表7に示した模擬授業者Cの授業評価の中で、S20が「ICT環境が整っている場合にはロイロノートの使用などもできると思った」と挙げていることから、学生がさらなるICT活用指導力向上への意欲を高めている状況であると考察する。

VI. 終わりに

本研究の目的は、教員養成段階における社会科授業力の向上を目指し、ICT活用指導力と授業構想力の2つの視点を重点とした社会科指導法に関する学生の学びの一端を明らかにすることであった。具体的には、学校現場で実施される校内研修における事前研究協議を参考に、模擬授業担当学生と科目担当教員が共に授業づくりを行う対話型授業構想を取り入れた。

本研究の成果として、対話型授業構想の取組は、授業構想力向上に寄与するものであり、それが社会科指導法における授業力向上に有効であったと考察する。さらに、ICT活用指導力に関しては、一定の成果があったものの、個別学習や協働学習における学習場面に關してのICT活用指導力について、さらなる研究の余地が残った。

令和の日本型学校教育の実現を目指し、その姿として全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」が求められている。教員養成段階における指導法に関する講義に關して、ICT活用指導力の育成とともに、従来の日本型学校教育の大きな成果といえる「協働的な学び」における授業方法や授業技術の育成についても従来通り求められているだろう。また、令和の日本型学校教育の実現に向けて、教職員の目指すべき姿として、「子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割」や「子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力」¹¹⁾についても注目が集まっているといえるだろう。子供一人一人の能力や可能性を最大限に引き出し、子供の主体的な学びを支援する教師の役割に關する研究を進めていく必要もある。それと同時に、教員養成段階における人材育成の充実によって、子供のより成長をサポートする若手教員が増えていくことで、各学校における教職員の資質・能力の向上を促し、学校教育の活性化を図ることができるのではないだろうか。

教育委員会も含めた各学校現場と大学との連携も

益々必要になっていくだろう。理論と実践の往還による効果を最大限に活用し、様々な機関が一体となって、子供たちのよりよい成長を促していくために、さらなる研究を深めていきたいと考える。

参考文献

- 1) 中央教育審議会(2021)『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)令和3年1月26日 pp.15-22
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (2022.12.26閲覧)
- 2) 中央教育審議会教員養成部会(2020)「教員養成部会審議まとめ」令和2年7月17日 pp.9-11
https://www.mext.go.jp/content/20210312-mxt_syoto02-000012321_3.pdf (2022.12.26閲覧)
- 3) 同書 p.10
- 4) 文部科学省(2019)「教育の情報化に関する手引 令和元年12月」 p.195
https://www.mext.go.jp/content/20200609-mxt_jogai01-000003284_003.pdf (2021.6.21閲覧)
- 5) 二宮孝行・杉浦勉・西出勉(2019)「学部生からみた教員に必要な資質能力に関する一考察」北翔大学北方圏学術情報センター年報第11巻 pp.159-164
- 6) 三浦公裕(2020)「算数科指導法における授業力向上の過程について-学生評価による授業スタイルの分類-」北翔大学北方圏学術情報センター年報第12巻 p.109-117
- 7) 三浦公裕(2020)同掲書 p.111
- 8) 山谷敬三郎(2012)『学習コーチング学序説-教育方法とコーチング・モデルの統合-』風間書房 p.273
- 9) 西岡加奈恵他編(2015)『新しい教育評価入門-人を育てる評価のために-』有斐閣 pp.144-167
- 10) 文部科学省(2019)前掲書 p.189
- 11) 中央教育審議会(2021)前掲書 p.16

(2023年6月30日受付, 2023年9月13日受理)

『教育への扉』竹谷出版学術ジャーナル
第3巻, 第2号

発行日: 2023年9月19日

発行元: 竹谷出版(竹谷教材株式会社出版事業部)